

# 第1章 弘道館記碑の沿革

## 第1節 特別史跡としての旧弘道館

弘道館は「旧弘道館」として、大正11年(1922)3月8日に史跡に指定され、昭和27年3月29日に特別史跡に指定された(図1)。管理団体は茨城県である(大正11年11月7日指定)。指定基準は史跡の四、学校であり、『指定物件解説書』によれば、「水戸藩の藩校として藩主徳川斉昭が創設したもの。天保十二年に開館、天保から安政にかけて、水戸学の中心として、尊攘志士の注目するところとなり、神儒の統一をめざし、さらに洋学の技術をも取り入れたが、建設後三年で斉昭(烈公)が藩主の職を退かなければならなかったため、その後の運営は改革・保守両派の争いによって円滑に行われず、万延元年(一八六〇)、斉昭死去の後は一層激しくなった。明治の戊辰戦争に佐幕派の屯するところとなり、水戸城を守る一隊との激戦で多くの施設が焼失した。この時残った建物は正門・正庁・至善堂・八卦堂(弘道館記碑)・聖廟・要石歌碑・警鐘等であったが、昭和二〇年の戦災で八卦堂・聖廟が失われ、昭和二八年八卦堂の再建、三十七年正庁・正門の大修理につづき、四十四年聖廟が再建された。」とある。

本来の弘道館の敷地は現在の指定地の約3倍にも及ぶものである(図2)。

内務省地理課嘱託・史蹟名勝天然紀念物調査会考査員であった柴田常恵が指定のための調査にあっており、その時撮影された弘道館関係の写真20数点が國學院大學に所蔵されている<sup>1)</sup>。

## 第2節 弘道館記及び記碑の成立過程

### 1 記碑の成立過程

徳川斉昭(烈公)は文政12年(1829)10月17日、第9代水戸藩主となるや、士風の衰えを改めるべく、文武の奨励などの改革に着手する。天保5年(1834)3月13日の藤田貞正(主書)への手紙(名越は同年9月ないし10月ごろのものとする<sup>2)</sup>)のなかで、斉昭はこれまでの儒者を「姑息学問」で無学に等しいと批判している。「学校出来たとて大儒を他より求むるに不及、書物多く有りて、見度書は人々心のまゝに読む事叶へは、其内には右に勝れたるも左に勝れたるも出来る事也。其内を撰ひて有用の方に用るがよき也。武芸とても同断也。」と、学校建設と人材登用との関係を述べている。

そして天保5年12月、建学の議を家老ら重臣に諮問する。この時、「学校絵図」も示したとされる<sup>3)</sup>。これに対し、藤田貞正らは経済の困窮を述べるとともに、建設するのであれば、徳川光圀(義公)の時代に朱舜水が作った大成殿の雛形によるべしとの意見を述べた。斉昭はその意見が矛盾に満ちていることを指摘し、江戸藩邸の家老らにも意見を聞くが賛成は得られなかった。このように門閥派の存在により学校建設を進めることは容易ではなかった。また、天保6年、水戸の家老らに教授を選考させたところ、旧思想に執着し、学派の対立さえ生じかねないものであったことから、同年6月26日藤田虎之介(藤田東湖)を御用調役に、8月6日戸田銀次郎(戸田忠敬<sup>ただあきら</sup>)を側用人見習いに任じる新体制をもって、準備を進めることとした<sup>4)</sup>。しかし、天保7年と8年は凶作に見舞われ、学校建設の計画は中断を余儀なくされた。

天保8年(1837)6月10日、藤田東湖に対し、建学の主意を和文で書き、それを菊池善左衛門に漢訳させたものを示し、起草を命じた。その前年、斉昭は彰考館総裁会沢正志斎に起草を命じたが、会沢は何らかの理由で辞退していた。東湖の日記から、7月3日に斉昭に「学校御碑文」(「弘道館記」の名は前日の日記にみえる)が提出されたことがわかる。東湖が天保8年9月28日に会沢に宛て

た手紙に弘道館記の作成の過程が窺うことができる<sup>5)</sup>。

初め齊昭は、彰考館の学者に示し、最後に幕府の儒官佐藤一斎に諮問することを考えていたが、東湖の意見により、まず、佐藤一斎に示し、また、青山拙斎にも示し、のちに彰考館に諮って決めるとの順番に改められた。そして齊昭がそれを裁定したのである。

『水戸藩史料』が齊昭の裁定の過程を20項目についてふれている。また、加藤虎之亮が館記の初稿を紹介している<sup>6)</sup>。さらに、加藤虎之亮は天保9年(1838)4月に写したものと伝えられる文章(伝

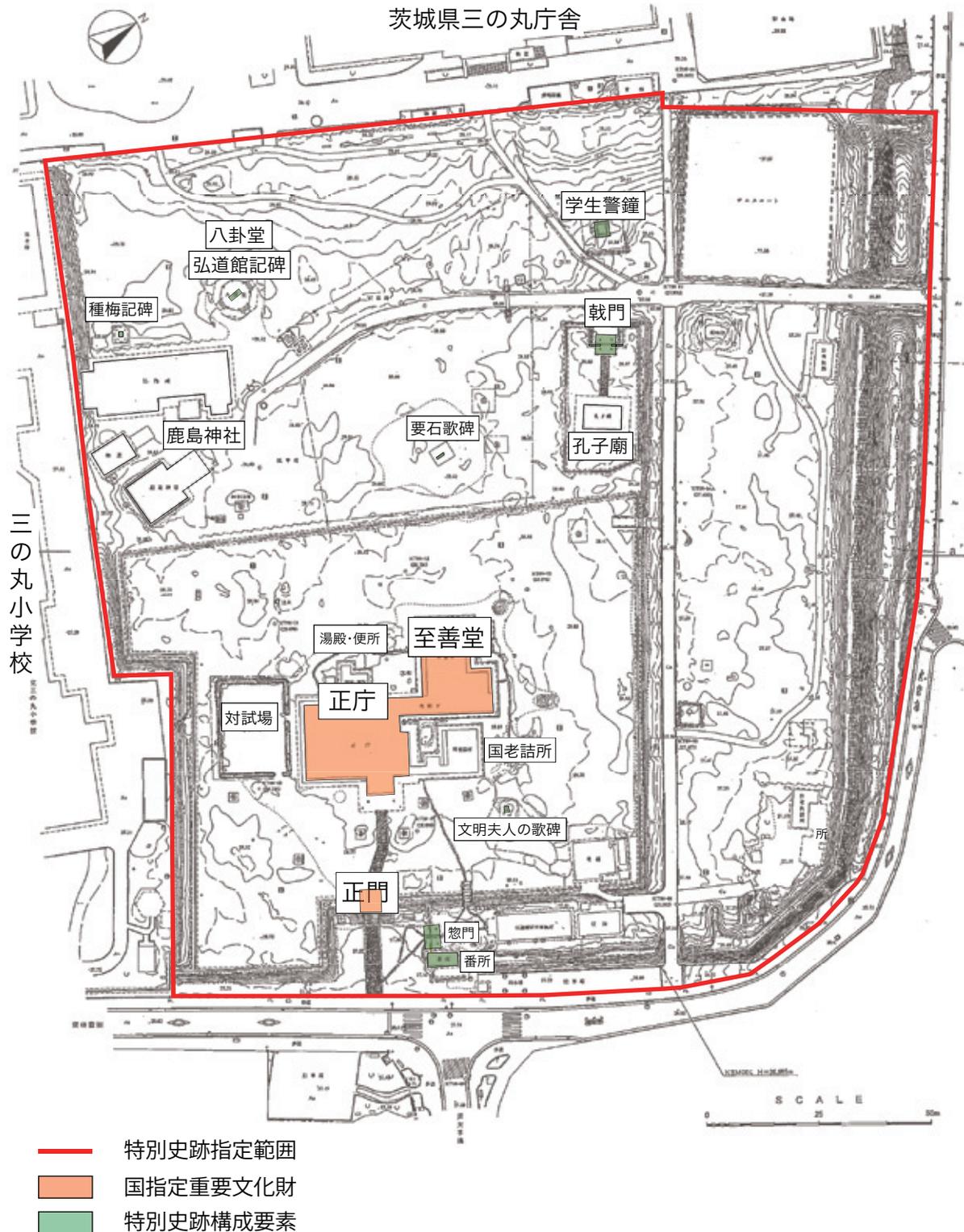


図1 旧弘道館の特別史跡の指定範囲と指定地内の諸施設 (弘道館事務所提供資料に加筆)

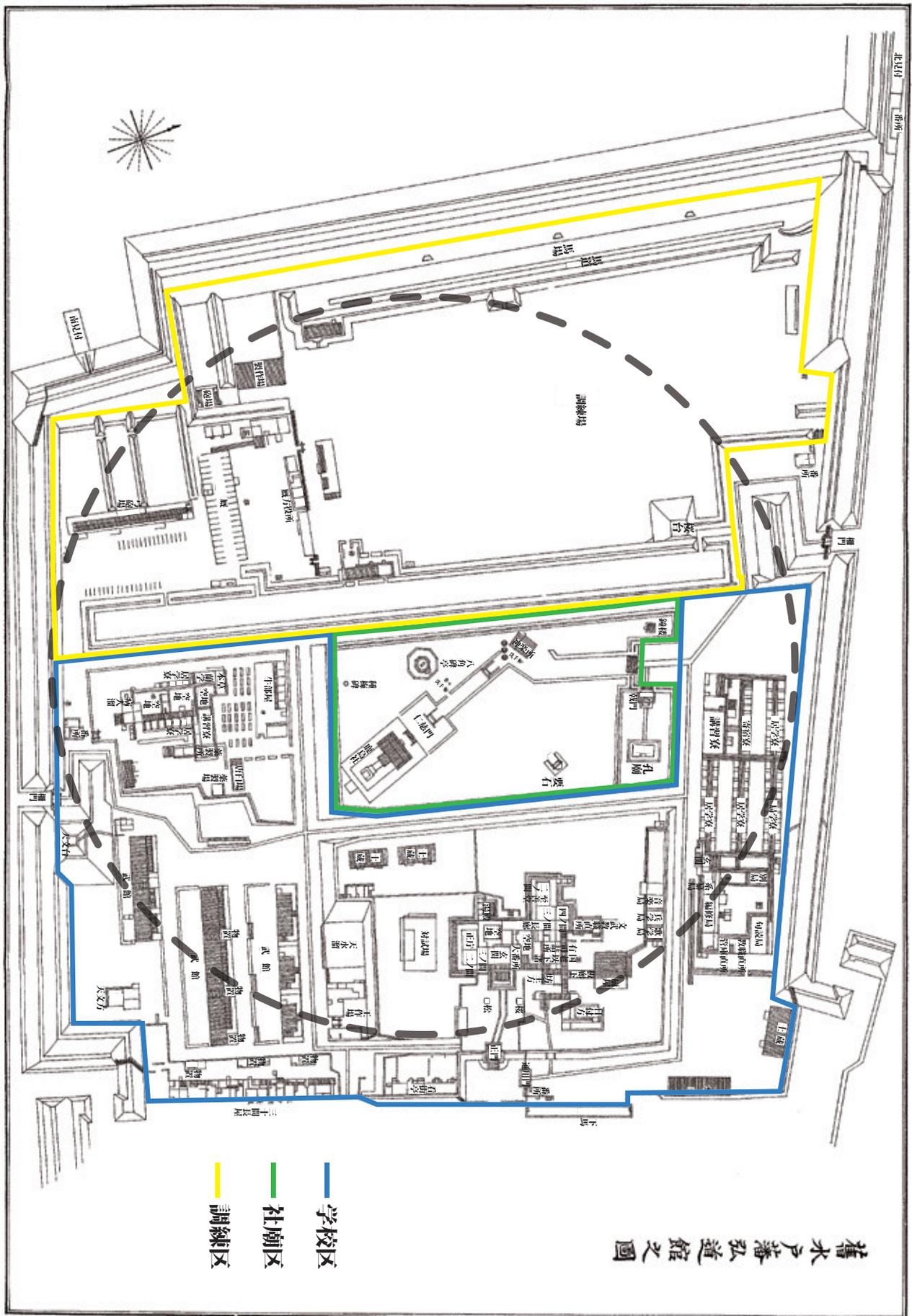


図2 旧弘道館の創建当初の敷地と空間構成 (加藤 1928 に加筆)

写文)と石碑の文章(石刻文)とを比較し、7箇所の相違点があることを指摘している。周到的な推敲が重ねられ、現在の文章が完成したのである。

「弘道館記」は「学校御碑文」「学舎碑文」とも呼ばれており、弘道館の名称が正式に決定する時期を『水戸市史』は天保8年8月下旬としつつ、一方で9月の段階でも「憚り多い」名とされた理由を、すでに佐賀藩や彦根藩の有力諸藩や、近くは谷田部藩(茨城県つくば市谷田部)のような外様小藩に先例のある名を採用することが、御三家水戸藩の面目にかかわると認識されていたのか、と推定している<sup>7)</sup>。「弘道館」の名は「学校御碑文」の冒頭に掲げた「弘道」に由来する名で

あることは言うまでもなく、東湖が推した名であった。弘道館記末尾に「天保九年歳次戊戌春三月齊昭撰文并書及篆額」とあるように、館記は天保9年3月に書き上げられた。

碑石は久慈郡と多賀郡の境に位置する真弓山から切り出された(図3)。最終的に切り出されたのは天保11年(1840)4月のことと考えられ、5月には搦本(石摺)がつくられ、贈答がなされている<sup>8)</sup>。石工是那珂湊の大内石了(利兵衛)であるが、程なく没したことから、後に齊昭が字句を改めた際、その子石可に鑄らせたという。碑石は八卦堂のなかに収められた<sup>9)</sup>。

## 2 弘道館記

弘道館記の原文は次のとおりである。

弘道館記

弘道者何人能弘道也道者何天地之大經而生民不可須臾離者也弘道之館何爲而設也恭惟上古

神聖立極垂統天地位焉萬物育焉其所以照臨六合統御寓内者未嘗不由斯道也

寶祚以之無窮國體以之尊嚴蒼生以之安寧蠻夷戎狄以之率服而

聖子神孫尚不肯自足樂取於人以爲善乃若西土唐虞三代之治教資以贊

皇猷於是斯道愈大愈明而無復尚焉中世以降異端邪說誣民惑世俗儒曲學舍此從彼

皇化陵夷禍亂相踵大道之不明於世也蓋亦久矣我

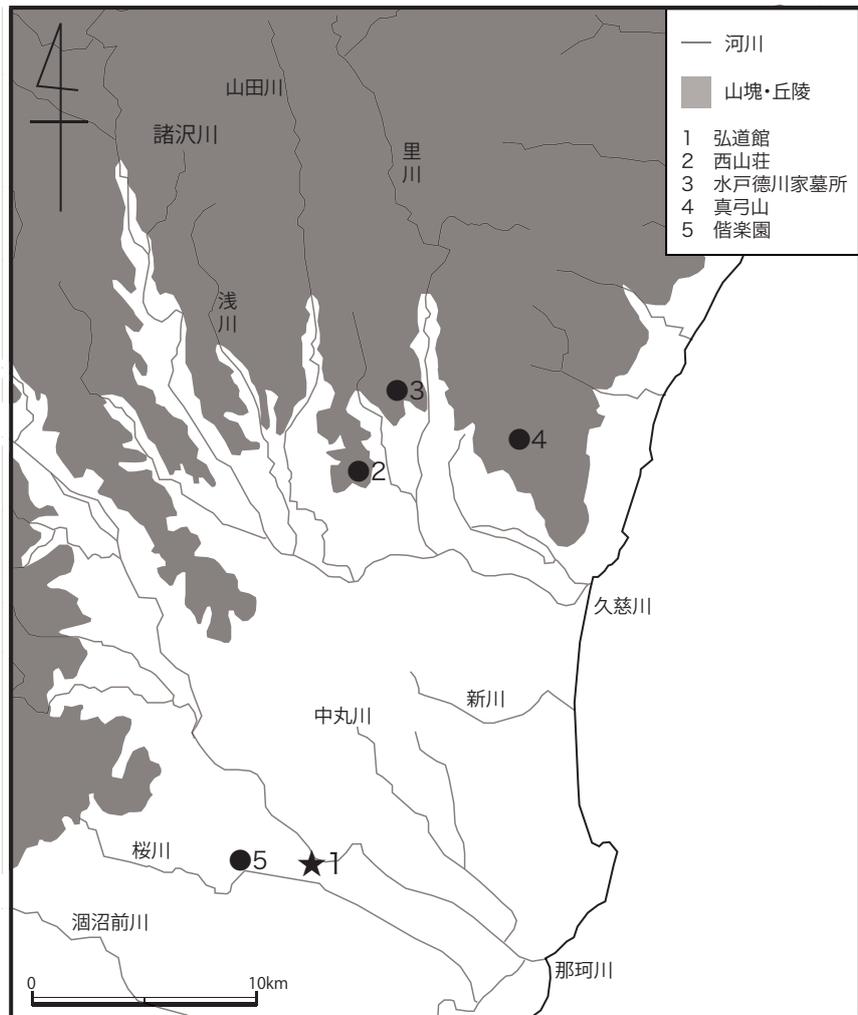


図3 弘道館と関連遺跡の位置関係

## 東照宮撥亂反正尊

王攘夷允武允文以開太平之基吾祖 威公實受封於東土夙慕

日本武尊之爲人尊神道繕武備 義公繼述嘗發感於夷齊更崇儒教明倫正名以藩  
屏於 國家爾來百數十年世承遺緒沐浴恩澤以至今日則苟爲臣子者豈可弗思  
所以推弘斯道發揚 先德乎此則館之所以爲設也抑夫祀

建御雷神者何以其亮天功於草昧留威靈於茲土欲原其始報其本使民知斯道之所  
繇來也其營孔子廟者何以唐虞三代之道折衷於此欲欽其德資其教使人知斯道之  
所以益大且明不偶然也嗚呼我國中士民夙夜匪解出入斯館奉 神州之道資西  
土之教忠孝无二文武不岐學問事業不殊其效敬神崇儒無有偏黨集衆思宣群力以  
報 國家無窮之恩則豈徒 祖宗之志弗墜

神皇在天之靈亦將降鑒焉設斯館以統其治教者誰權中納言從三位源朝臣齊昭也

天保九年歲次戊戌春三月齊昭撰文并書及篆額

読み下しを以下に示す<sup>10)</sup>。

## 弘道館記

弘道とは何ぞ。人、能く道を弘むるなり。道とは何ぞ。天地の大経にして、生民の須臾も離るべからざるものなり。弘道の館は、何のためにして設けたるや。恭しく惟みるに、上古神聖、極を立て統を垂れたまひて、天地位し、萬物育す。その六合に照臨し、寓内を統御したまひし所以のもの、未だ嘗て斯道に由らずんばあらざるなり。寶祚、これを以て無窮、國體、これを以て尊嚴、蒼生、これを以て安寧、蠻夷戎狄、これを以て率服す。しかも聖子神孫、なほ肯へて自から足れりとせず、人に取りて以て善を為すことを楽しみたまふ。すなはち西土唐虞三代之の治教のごときは、資りて以て皇猷を賛けたまへり。是に於て、斯道いよいよ大に、いよいよ明らかにして、また尚ふるなし。中世以降、異端邪説、民を誣い世を惑し、俗儒曲学、此を捨てて、彼に従ひ、皇化陵夷し、禍乱相踵ぎ、大道の世に明らかならざるや、蓋しまた久し。

我が東照宮、撥亂反正、尊王攘夷、允に武、允に文、以て太平の基を開きたまふ。吾が祖威公、實に封を東土に受け、夙に日本武尊の人となりを慕ひ、神道を尊び、武備を繕む。義公、繼述し、嘗て感を夷齊に発し、さらに儒教を崇び、倫を明らかにし、名を正し、以て国家に藩屏たり。爾來百數十年、世、遺緒を承け、恩澤に沐浴し、以て今日に至れり。すなはち苟しくも臣子たる者は、豈に斯道を推し弘め、先徳を發揚する所以を思はざるべけんや。これすなはち館の、為に設けられし所以なり。そもそも、夫の建御雷神を祀るものは何ぞ。その、天功を草昧に亮け、威靈をこの土に留めたまへるを以て、その始を原ね、その本に報い、民をして斯道の繇りて来るところを知らしめんと欲するなり。その孔子廟を営むものは何ぞ。唐虞三代之の道、ここに折衷するを以て、その徳を欽ひ、その教を資り、人をして斯道のますます大にして且つ明らかなる所以の、偶然ならざるを知らしめんと欲するなり。

嗚呼、我國中の士民、夙夜解らず、斯の館に出入し、神州の道を奉じ、西土の教を資り、忠孝二無く、文武岐れず、学問・事業、その効を殊にせず、神を敬ひ、儒を崇び、偏党あるなく、衆思を集め群力を宣べ、以て国家無窮の恩に報いなば、すなわち豈にただに祖宗の志、墜ちざるのみならんや、神皇在天の靈も、またまさに降鑒したまはんとす。

斯の館を設けて、以てその治教を統ぶる者は誰ぞ。権中納言從三位源朝臣齊昭なり。

天保九年歲次戊戌春三月、齊昭撰文並びに書、及び篆額

弘道の語は『論語』の「衛靈公篇」に「子曰く、人能く道を弘む。道、人を弘むるに非ざる也」とみえる。人が道を弘めることができるのであって、その逆ではない。では、道とは何か。天地自

然の秩序である。そして弘道館設立の目的、建御雷神を祀る理由、孔子廟を営む理由を次々と述べる。ここには、「神儒一致」「忠孝一致」「文武一致」「学問事業一致」「治教一致」の5つの方針が記されている<sup>11)</sup>。本開館を機に定められた学則の第一には、「當に親製の記文を熟読し、審かに深意の在る所を知るべし。神道・聖学の其の致を一にする、忠孝の其の本を二にせざる、文武の岐つべからざる、学問事業の其の効を殊にすべからざる、皆宜しく記文の意を奉承し、黽勉服膺すべし。」とある。勉学するものは、この弘道館記を熟読、暗誦したものと考えられる。弘道館は道を弘めることのできる人物を育てることを目指したのである。

記碑には罫線が引かれ、二十行、総字数515文字である。隸書体で、擡頭、平出、闕字の書式に則っている。石摺のほか、木版も作成されており<sup>12)</sup>、木版による拓影にも数種存在するようである<sup>13)</sup>。

### 3 弘道館の建設とその構造—記碑の中心性—

前節でみたように、弘道館の「真髓であり、眼睛である」<sup>14)</sup>弘道館記は天保9年3月に書き上げられた。学校建設の方針であるから当然とはいえ、学校建設に先立ってまとめられたという点はきわめて重要である。天保10年正月には学校敷地を三之丸とすることが決定され、翌11年水戸に帰国した斉昭は、2月には執政渡辺寅、参政戸田忠敬、側用人藤田東湖を弘道館掛に任じ、工事を普請奉行に委任して事業を進めた。竣工は天保12年(1841)7月のことであった。建設資金は「御手元金」(天保6年から5ヵ年毎年5千両ずつ幕府が助成)を運用することによって捻出された。

天保12年8月1日、弘道館の仮開館式が挙行された。安政4年(1858)5月9日に実施されたものを本開館式と呼ぶが、仮であったのは、この段階では建物が完備せず、特に鹿島神社に、鹿島神宮からの分神遷座がなされず、聖廟に孔子神位の安置も済んでいなかったことによる。弘道館は学校区、靈域あるいは聖域とも言うべき社廟区、調練区の3つに区分することができる<sup>15)</sup>。

学校区には、学校御殿とも呼ばれる正庁、至善堂(藩主の座所と諸公子会読の場)、文武教職の直所(詰所)などからなる建物と、それをはさむように南北に配された文館と武館、さらに武館の奥に医学館(天保14年建設)があり、正庁前庭には対試場がある。建物の配置は右文左武のごとく、文武一致の教育方針を表している。

社廟区は全体の敷地のほぼ中央に位置し、弘道館の中核的存在であることを体現している。そのさらなる中心が八卦堂(図4)のなかに収められている弘道館記碑(図5)である<sup>16)</sup>。

鹿島神社、孔子廟は神儒一致の精神を表して



図4 大正から昭和初期の八卦堂

『柴田常恵写真資料目録1』より転載(國學院大學所蔵)



図5 大正から昭和初期の弘道館記碑

『柴田常恵写真資料目録1』より転載(國學院大學所蔵)

いる。要石の歌碑や学生警鐘と呼ばれる鐘楼の鐘には斉昭の歌が彫られている。「種梅記碑」も斉昭自撰の碑である。

調練区には調練場をはさんで東と西に南北に長い馬場がある。砲場、厩、厩方役所などの建物があった。

弘道館の中心には図2のように弘道館記碑が据えられている。仮開館式の段階では、なお記碑の位置は現在地に定まっていなかった可能性がある<sup>17)</sup>、現在地に配置されることによって記碑の弘道館における重要性と中心性は確定した、と言える。

### 第3節 戦後の弘道館記碑の修復

#### 1 戦後の状況

昭和20年(1945)8月2日の水戸空襲で焼夷弾が八卦堂を直撃し、八卦堂は全焼した。「弘道館保存修復写真記録」<sup>18)</sup>の中で、関孤円が「大理石の館記碑は焼損したあと雨ざらしになったまゝ八年余の歳月を過ごしたが、昭和二十八年六月(八卦堂の)復元工事に着手し…」と記した通り、弘道館記碑は損傷を受けながらも倒れることなく立っていた。このため、昭和28年(1953)の八卦堂復元工事の際までは、弘道館記碑は空襲による損傷を受けたままの状態であった。

#### 2 昭和28年の修理

##### (1) 弘道館記碑のコンクリート補強

昭和28年の八卦堂の再建と合わせた記碑の修理について当時の記録はないが、(財)美術院の昭和47年の修理解説書を参考に、今回の修理に伴う知見を合わせると、当時の修理は次のようなものであった。

- ①記碑の上面及び左右両側面を厚さ45cmのコンクリートで、記碑の背面を厚さ30cmのコンクリートで、それぞれ包んだ。
- ②杉板で額縁をつくり、碑身頭部文様部分とその下の碑文部分の間に幅10cmの横板を設けて、表面の剥離を抑えた。
- ③台石の上面及び側面をコンクリートで覆った。

##### (2) 八卦堂の再建

昭和28年12月12日付『いはらき』新聞に、八卦堂復元完成の記事が大きく掲載されていることから、県民の関心が高かったことが窺われる。また、記事には、資材や賃金の値上がりで建設費が予算を大幅に超えてしまい、工事の継続が困難となったため、工事請負人の志賀野氏が私財50万円を注いで工事を完成させたことが記されている。

社会状況としては、同じく水戸空襲で全焼した偕楽園の好文亭復元工事の着工が昭和30年(完成は昭和33年)であり、戦後の県内の文化財の修理・復元としては、八卦堂の復元が最も早い時期にあたり、弘道館記碑の重要性が認識されていたと思われる。

現在、弘道館事務所には昭和28年再建の八卦堂の1/20詳細図が残されている(図6)。

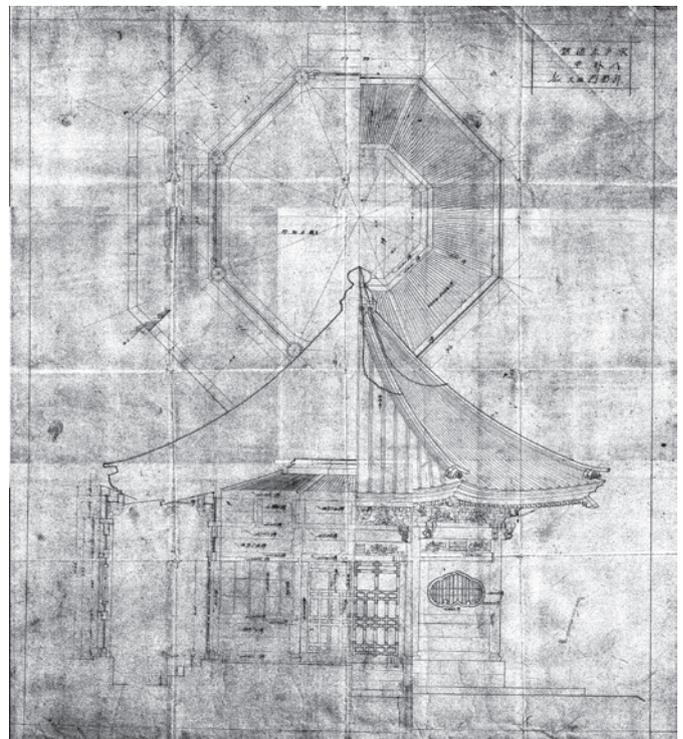


図6 八卦堂の青焼詳細図 (弘道館事務所所蔵)  
(1/20 詳細図をスキャン後、レタッチソフトで白黒反転し、縮小表示)

現在の建物に相当するものであるが、後述する昭和 43 年、44 年の修理により、若干異なる部分がある。工事請負人は志賀野工務店で、工費は 104 万円、6 月に工事に着手し、11 月に竣工している<sup>19)</sup>。

### 3 昭和 47 年の修理

#### (1) 弘道館記碑の修理

公益財団法人美術院に、前身の財団法人美術院が昭和 47 年に行った弘道館記碑関連資料の契約関係書類や実測図が保管されていることが震災後にわかり、資料の提供を受けた。修理解説書には次のように記されている（図との対応は付記したもの）。

#### 修理概要

発注者 茨城県商工労働部観光課  
施工者 財団法人美術院  
施工場所 現地（旧弘道館八卦堂内）  
施工期間 昭和 47 年 8 月 17 日から  
同年 10 月 25 日（70 日間）  
修理費用 1,558 千円

#### 損傷状況

- ①昭和 20 年 8 月の戦災により、各所に亀裂及び脱落欠失の個所が多かった（図 7 下段）。
- ②碑文の表皮に剥落浮上り部が多かった（図 7 上段）。
- ③現在は応急処理として、コンクリート（厚 45cm）で両側、上面、背面を包み、正面には杉材で額縁式にかこみ、さらに横板（巾 10cm）で表皮の浮上りをおさえていた（図 7 上段）。

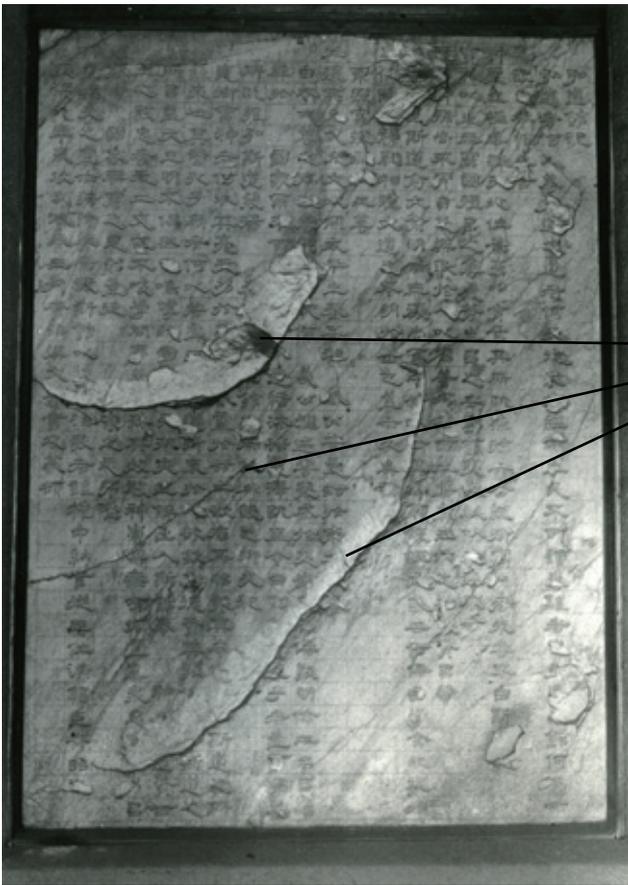
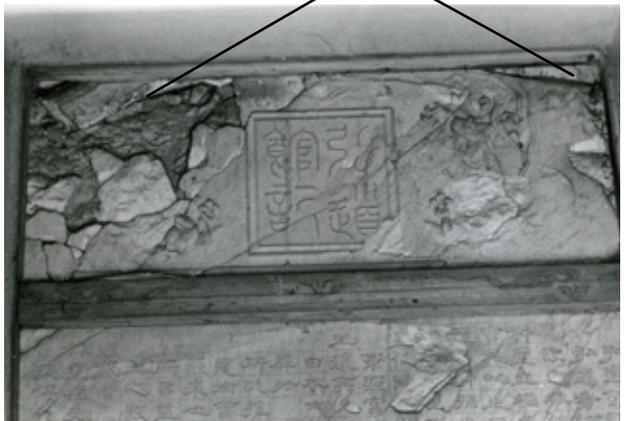
#### 修理内容

- ①碑文の表面をまずプライマル樹脂（剥落留め、アクリル樹脂エマルジョン）を塗布して硬化し、表皮の剥落浮上り部はエポキシ樹脂（硬化剤との化学反応により優れた接着性・耐熱性等をもつ機能性樹脂）で充填接着した。以上の予防処置を完全にした上、コンクリート除去作業にかかった（図 8 上段）。
- ②コンクリートには鉄筋を使っていたので除去作業は予想以上に難行した（図 8 下段）。除去作業中、碑の左側中央部より上は殆んど欠失し、碑全体がコンクリートによって支えられている状態を発見したので（図 8 下段）、後面部はそのままにして両側面部のみ除去した。
- ③コンクリート除去後両側面の寒水石肌に附着した汚れを整理し、バインダー樹脂（基材に対する密着性を向上させる働きがある樹脂）を全面に塗布した。
- ④石肌の各亀裂部はエポキシ樹脂を充填し、正面左上部の大欠失個所はエポキシ樹脂で補い表皮だけが脱落したように整形した（図 9 中段）。
- ⑤両側及び後部のコンクリート面は FRP（Fiber Reinforced Plastics）で包んで補強し、さらにエポキシ樹脂で塗装した（図 9 下段）。
- ⑥基台のコンクリートは現状のままにした（図 10）。



- 天井近くまで碑身を厚いコンクリートが包む。
- 幅 10cm の横板で表皮の浮上りを抑える。
- スギ材で碑文を額縁式に囲む。
- 厚さ 45cm のコンクリートで両側・上面を、厚さ 30cm のコンクリートで背面をそれぞれ囲む。

脱落欠失箇所

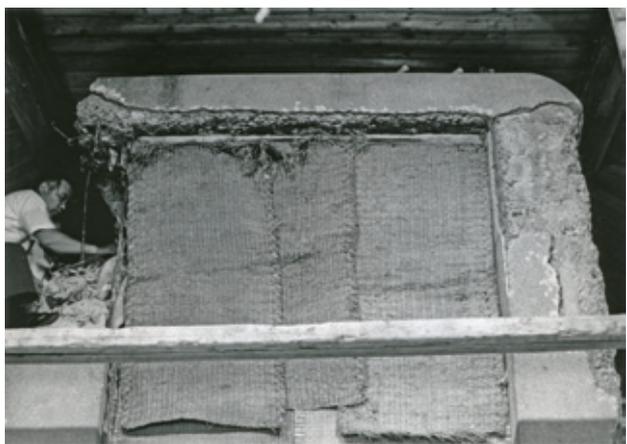


戦災による亀裂

碑身頭部左側の脱落欠失箇所



図7 昭和47年の弘道館記碑の修理前の状況 ((公財) 美術院蔵)



碑身左側のコンクリート除去作業



コンクリート除去作業中に現れた細い丸鋼



碑身が  
大きく欠失

背面の  
コンクリート  
は残す

碑身正面に向かって左側面

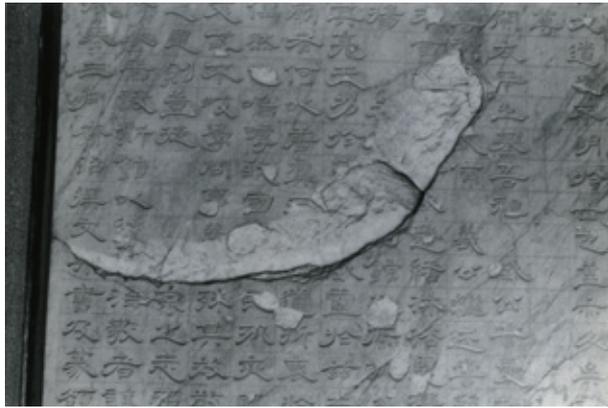


碑身正面に向かって右側面



コンクリート除去後の碑身頭部

図8 昭和47年の弘道館記碑のコンクリート撤去状況 ((公財) 美術院所蔵)



亀裂部分（修理前）



亀裂部分（修理後）



正面左上部の大欠失箇所（修理前）



正面左上部の大欠失箇所（修理後）



作業の様子



ガラス繊維貼付作業

図9 昭和47年の弘道館記碑の修理状況（（公財）美術院所蔵）



修理後の左側面

修理後の正面

修理後の右側面

図 10 昭和 47 年の弘道館記碑の修理後の状況 ((公財) 美術院所蔵)

## (2) 八卦堂の修理

記碑の修理に合わせるように、八卦堂の修理も行われた。昭和 47 年 10 月 31 日付け「いはらき」新聞によると、戦後の再建には焼失前に茨城大学の学生が引いた図面が参考にされたが、屋根の勾配と擬宝珠台に若干の違いが認められていた。焼失前は屋根の勾配の一番深いところ(弦と弧の間隔)は 45cm であったが、25cm と緩やかになっており、擬宝珠は直径 90cm と以前より 1/3 大きくなっていた。『弘道館施設台帳』によると、昭和 43 年に擬宝珠修理工事、44 年には建物修理を行っており、この修理に 560 万円をかけたという。昭和 47 年には、避雷帯設置工事・自動火災報知器設置工事を行っている。

## 第 4 節 震災前の状況

### 1 東京文化財研究所による調査報告

本事業の委員である、東京文化財研究所保存修復科学センター長の石崎武志氏が平成 20 年 11 月 18 日に行った調査に基づいて弘道館事務所に次のような報告を行っており、震災前の保存状況が詳しく述べられている。

#### 弘道館記碑の劣化状況

弘道館記碑は、大理石で作成されており、空襲で破壊された記碑の背面はセメントモルタルで固められているようである。大理石の表面は粉状になっているが、これは非常にゆっくりとした劣化の過程であり、チョーキングやパウダリングと呼ばれる現象である。大理石は酸性雨等で劣化が進むが、ここでは八卦堂により直接雨水の影響を受けないので、その心配はないものと考えられる。ただ、今後、どのような場所でどれくらいの速度で剥落が進んでいるのかは継続的に観察し、必要に応じて剥落止めの様な処置も考える必要があると思われる。以前に行われた樹脂処理に関しては、樹脂の同定を行い、劣化の原因となっている場合はその樹脂を取り除き、再処理を行うことなども考えられる。

また、記碑が雨水の影響を受けないことと、また、大理石内の水分量は少ないものと考えられるので、後方のセメントモルタルの影響は受けていないものと考えられる。

現在の状態を記録するのに三次元レーザー測量により、石碑の形状をデジタル情報として記録し

ておくことも、今後の劣化状況の評価、また、劣化した後の復元をする上で有益であると考えられる。

### 弘道館記碑の保存環境

石碑の背面に多数の虫が見られた。これに関しては病虫駆除の専門家の意見に従い、適切な方法で排除すべきである。

八卦堂は所々隙間があり、外気の影響を受けるため、記碑の周辺の湿度変動は大きいものと考えられる。これはデータロガーなどで、温湿度の継続的な記録を取ることで、保存環境の現状を把握することが必要である。

保存環境の改善方法としては、八卦堂の気密性を高くすること、断熱性を高くすることなどが考えられるが、適切な対策を考える上で、八卦堂内の温湿度を継続的に測定することが重要である。

## 2 写真計測による弘道館記碑の記録作成

平成 19 年 10 月 26 日に有限会社三井考測（代表取締役：三井猛氏）による弘道館記碑の写真計測が行われている。前年度に同社が茨城県より依頼された「特別史跡弘道館の地形及び遺構調査業務委託」の調査の際、弘道館記碑の重要性を認識したため、文化財記録の観点及び計測学的な視点から写真計測用撮影記録を同社が試験的に作成したものである。データ処理はレーザースキャナに迫るレベルで計測点群計算と画像処理が行える、最新の写真計測のデータ処理手法である SFM (Structure From Motion) によって行われており、将来にわたり文化財記録として有効に活用できるものである。

その成果は、震災前の弘道館記碑の状況を詳細に記録した唯一のものであり、大変に貴重かつ有用である。

## 3 公開の状況

弘道館記碑を収める八卦堂は、弘道館の敷地中央の聖域に位置し、藩校当時は儀式を執り行う時や学生が登校する際に礼拝をすることになっていたという。藩校閉鎖後は、弘道館記碑の保管のため堂宇の扉は閉じられ、現在も管理上及び弘道館記碑の重要性に鑑み通常は非公開となっている。

近年では、平成 21 年に水戸藩開藩 400 年関連イベントとして 8 月と 11 月に八卦堂特別公開が実施され、多くの見学者が訪れた。

## 第 5 節 東日本大震災による弘道館記碑の被災状況

水戸市の東日本大震災での震度は 6 弱、東面する記碑にとって左右方向よりも前後方向の揺れが大きかった。八卦堂はほとんど被害はなかったが、弘道館記碑は碑身の各所に多数の亀裂が生じ、碑文中央部は右上から左下にかけて石塊や多数の石片となって崩壊し、台石の上やその前面に散乱した(図 11)。台石を覆うコンクリートにも複数の亀裂が見られた。散乱の状況は以下の通りであった。

- ・多数の石塊、石片、石粉が碑身前面に散乱しているが、碑身下に集中し、その範囲は広くはない。
- ・台石上には比較的小さいものが載り、大きいものは台石下に分布する。
- ・崩落量は碑に向かって右側が多い。
- ・台石下の側面は、左側より右側が多い。
- ・碑文の小片が数点、碑身下方部で挟まるようにして留まっていた。



図 11 弘道館記念碑の被災状況

註

- 1) 國學院大學日本文化研究所 2004 『柴田常恵写真資料目録1』
- 2) 名越漠然 1944 『水戸弘道館大観』茨城出版社 31 頁
- 3) 『水戸藩史料別記卷十七』 256 頁
- 4) 但野正弘 2002 『水戸烈公と藤田東湖「弘道館記」の碑文』錦正社
- 5) 名越前掲書 103 頁
- 6) 加藤虎之亮 1928 『弘道館記述義小解』
- 7) 水戸市 1976 『水戸市史』中巻(三)
- 8) 『水戸藩史料別記卷十七』 284-285 頁
- 9) 名越前掲書 119 頁。同書によれば、碑の大きさは下表の通りである。小泉芳敏氏は記念碑の作成過程を詳細にたどっている(「弘道館記及館記念碑作成の経緯」『水戸史学』第四号 昭和 51 年 3 月)。氏によれば、一旦完成し、拓本がとられた後に「又配孔宣父者何」の文字が問題となり、「出来上った碑面を一段けずり、磨き直して彫刻した」としている。それを裏付ける拓本も存在したとしている。氏の記述は、福田耕二郎氏の記述(福田耕二郎 1963 「館記念碑と至善堂扁額について」『KANKO IBARAKI』)に拠ったものである。なお、天保 9 年正月に瀬谷村から寒水石を切り出し(「御山取」、枝川まで運送することについて太田村の重助なる人物が請け負ったとの記録が存在する。7 月には拝借金の願いが出されており、その段階では採石の作業がなお完了していないことが窺える(『太田村御用留』常陸太田市所蔵)。福田氏が依拠した史料は明確でないが、何らかの史料に基づいている可能性がある。参考として氏の報告をまとめておく。

弘道館記念碑の建立までの流れ

和暦(西暦)	出来事
天保 8 年(1837)	斉昭(烈公)の名で郡奉行が碑石に適した石材を探し、寒水石に決定する。
天保 9 年(1838) 2 月	領内真弓山(常陸太田市)からの碑石用の寒水石が採掘される。
天保 9 年(1838) 12 月 13 日	弘道館の敷地内に碑石用の寒水石が運び込まれる。
天保 10 年(1839) 8 月	石碑の彫刻が開始される。台石の山取を命じる。
天保 11 年(1840) 春	石碑が完成する。
天保 11 年(1840) 9 月 8 日	斉昭(烈公)、碑文の一部を訂正するため全面的に彫刻をし直すことを命じる。
天保 12 年(1841)	石碑が完成する。

**建立時の弘道館記碑の碑身及び台石の大きさ**

碑身	高さ	10尺5寸(約318cm)
	幅	6尺3寸(約191cm)
	厚さ	1尺8寸(約55cm)
台石	高さ	2尺(約61cm)
	横幅	10尺(約303cm)
	奥行	5尺(約151cm)

- 10) 鈴木暎一 2003 『水戸弘道館小史』文眞堂 等を参照した。
- 11) 『水戸市史』前掲、鈴木暎一 1987 『水戸藩学問・教育史の研究』吉川弘文館
- 12) 名越前掲書 122頁
- 13) 加藤前掲書口絵に、根本正氏所蔵の「弘道館記石刻縮写」が掲載されている。建碑の前に、碑面と同大の紙六十枚を特製して拓本を採ったとし、掲載の「縮写」の原図はそのうちのひとつだとしている。名越前掲書の拓影と比較すると、名越のものは罫線がかなり鮮明である。両者は最上部の罫線に違いが見られるほか、罫線の外の余白が天地左右とも名越のものは狭く、また、外周の枠の幅も狭く、異なっている。現在、徳川ミュージアム所蔵の資料の調査が進行しており、記碑の成立過程についても新たな事実が明らかとなることが期待される（徳川ミュージアム 2014 『平成25年度地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業「開校・彰考館」プロジェクト 水戸徳川家関連史料調査・活用事業報告書』）。
- 14) 名越前掲書 9頁
- 15) 『水戸市史』中巻（三）前掲
- 16) 『水戸市史』中巻（三）は「万物変化の相を示した八卦の中に、常に不動の道の存在を強調し、その道を求め実践することを、教育の方針とする弘道館記の碑を収めたことには、深い配慮があったものと考えられる」としている。
- 17) 鷹見泉石が天保12年8月に「借写」した「水戸弘道館之図」（「天保十二丑日記」古河歴史博物館編 2003 『鷹見泉石日記 第五巻』吉川弘文館）によれば、記碑の位置がやや異なり、八卦堂にまだ収められていない様子が窺える（小塚のり子 2012 「弘道館・借楽園関係資料目録（補遺）及び解題」『近世日本の学問・教育と水戸藩Ⅲ』水戸市）。
- 18) 関弧円 1966 「弘道館保存修復写真記録」『週刊てんおん：水戸風土誌』滝田宏
- 19) 関前掲書 12頁